アダム・スミス　Smith,Adam　1723〜1790

18 世紀ヨーロッパを代表する知性の一人で、スコットランド学派の代表であり、古典派経済学の祖とされる。スコットランドのカーコーディ生まれ。14 歳からグラスゴー大、オックスフォード大で学び、1751 年からグラスゴー大学で道徳哲学の教授となり、10 年余り倫理学講座を担当。親友ヒュームとの交流の中、1759 年『道徳感情論』を公刊し、道徳哲学者として全ヨーロッパにその名が知れ渡った。その名声により、バックルー公旅行付添教師の地位を得て、1763 年には教授の職を辞し、約３年ヨーロッパ諸国を旅し、ルソー、ケネー、ヴォルテール等と親交を持った。スミスの貴族の家庭教師という地位がイギリス政界との接触をもたらし、その接触が彼の社会的関心をかき立て、「国富論」を書く動機を生み出したとされている。帰国後、およそ 10 年かけて『国富論』すなわち『諸国民の富の本質と原因に関する研究』(1776)を書き上げた。その後も 1790 年に 67 歳で亡くなる直前まで、自著の改訂作業を続け、自らの研究にその身を捧げた。

Great Books 30　国富論(An inquiry into the nature and causes of the wealth of nations)

原著名を直訳すると「諸国民の富の本質と原因に関する研究」であるが、「富国論」「国富論」「諸国民の富」等と略称されることが多い。資本主義社会の最初の体系的把握であり、古典学派経済学の代表的著作の一つである。1776 年３月９日に刊行され、６ヶ月で完売し、以後スミスの生前に５版を重ねた。日本では明治初め、石川暎作らにより翻訳され、経済的自由主義の古典として受入れられた。

全部で５編からなるこの著作は、「あらゆる国民の年々の労働は、国民が年々消費する生活の必需品と便益品のすべてを供給するみなもとであって、この必需品と便益品は、つねに、労働の直接の生産物であるか、またはその生産物で他の国民から購入したものである。」という有名な言葉から始まる。スミスは「生活の必需品と便益品」の豊かさが、即ち諸国民の富であり、労働がその源泉であることから、すべての価値は労働から生まれるとする「労働価値説」をとった。

スミスに先立つ重商主義の時代には、国家や国民の豊かさは金銀の獲得と貨幣の蓄積にあるとされ、それは「貿易差額」によってのみもたらされると考えられていた(重農主義では自然の恵みによる農業上の生産物)。当時イギリスは、広範な植民地の軍事的支配の基礎の上に保護貿易政策をとり、独占的な統制経済を築き上げていた。スミスは、力ずくの植民地支配は早晩破綻することを予見し、最も自然に、かつ最も早く国を豊かにするには、個人の利己心による自由な経済活動を放任し、「**見えざる手**」にまかせることがよいとした。

各人の利己心に基づく活動を自由に放任しておけば、「見えざる手」に導かれて、自然に交換は普及し、分業は発展し、生産力は高まってゆく。農業、商業、工業が順次発展し、国内の生産力が外国貿易へと「自然的経路」をたどってあふれ出ることにより、資本主義社会が、最も順調に発展するとした。「見えざる手」という言葉は、第４編第２章に一度でてくるに過ぎないが、スミスの自由主義経済思想を端的に表しているといえる。またスミスは、自由経済社会が順調に存続するための、国防・司法・教育・土木等・国家の役割を述べた。

『国富論』により、スミスはその現在に至る経済学の原型を示し、名声を不動のものとしたのである。

Key Word　見えざる手(an invisible hand)

もちろん、かれはふつう、社会一般の利益を増進しようなどと意図しているわけではないし、また自分が社会の利益をどれだけ増進しているのかも知らない。外国産業よりも国内の産業活動を維持するのは、ただ自分自身の安全を思ってのことである。そして、生産物が最大の価値をもつように産業を運営するのは、自分自身の利得のためなのである。

だが、こうすることによって、かれは、他の多くの場合と同じく、この場合にも、**見えざる手**に導かれて、自らは意図してもいなかった一目的を促進することになる。かれがこの目的をまったく意図していなかったということは、その社会にとって、これを意図していた場合にくらべて、かならずしも悪いことではない。自分の利益を追求することによって、社会の利益を増進しようと真に意図する場合よりも、もっと有効に社会の利益を増進することもしばしばあるのである。

＜大河内一男(責任編集)『世界の名著 31　アダム・スミス』　中央公論社＞

◆ *Great Books 文献案内*

🕮 国富論１～４(岩波文庫)／水田洋(監訳)
岩波書店　２０００年刊～　＜ｲ331／ｽ／1～4＞
＊現在刊行中

🕮 国富論１～３／大河内一男(監訳)
中央公論社　１９７６年刊　＜331.3／333／1～3＞

🕮 世界の名著 31　アダム・スミス／大河内一男(編)
中央公論社　１９６８年刊　５８２ｐ　＜080／5／31＞　資料番号 12784492

🕮 諸国民の富１～５(岩波文庫)／大内兵衛，松川七郎(訳)
岩波書店　１９５９～１９６６年刊　＜Hｲ331／S10／1～5＞

🕮 An inquiry into the nature and causes of the wealth of nations vol.1,2 (6th ed／Cannan ed)
／Adam Smith(by)
Methuen　１９５０年刊　＜331.32／S／1～2＞　資料番号 13291240，13291257

🕮 An inquiry into the nature and causes of the wealth of nations (Edwin Cannan ed)
／Adam Smith(by)
The Modern Library　１９３７年刊　６０，９７６ｐ　＜Y331.42／1＞　資料番号 21034186

🕮 The wealth of nations vol.1, 2／Adam Smith(by)
Dent　１９１０年刊　＜Y331.41／2／1～2＞　資料番号 21134754，21134762

◆ *理解を深めるために　　参考文献案内*

🕮 アダム・スミス伝／Ｉ．Ｓ．ロス(著) 篠原久(ほか訳)
ｼｭﾌﾟﾘﾝｶﾞｰ･ﾌｪｱﾗｰｸ東京　２０００年刊　５６７ｐ　＜289.3JJ／1427＞　資料番号 21248166

🕮 アダム・スミスの倫理学　上・下／田中正司(著)
御茶の水書房　１９９７年刊　＜150.23GG／104／1,2＞　資料番号 20998449,20998456

🕮 自由主義の夜明け／水田洋(著)
国土社　１９９０年刊　２２１ｐ　＜289.3Y／1007＞　資料番号 20201455

🕮 国富論体系の歴史と理論／小柳公洋(著)
ミネルヴァ書房　１９８１年刊　２７４，９ｐ　＜331.32M／12＞　資料番号 10811024

🕮 『国富論』の成立／経済学史学会(編)
岩波書店　１９７６年刊　４２１，２０ｐ　＜331.3H／332＞　資料番号 10810752

🕮 アダム・スミスの市民社会の体系／高島善哉(著)
岩波書店　１９７４年刊　３２７，１１ｐ　＜331.3／311＞　資料番号 10810554

🕮 道徳感情論／アダム・スミス(著) 水田洋(訳)
筑摩書房　１９７３年刊　５５８ｐ　＜150.1D／21＞　資料番号 10234730

🕮 アダム・スミスの味／大河内一男(編)
東京大学出版会　１９６５年刊　３２８ｐ　＜331.3／188＞　資料番号 10808921
＊「続」あり。(１９８４年刊　３４４ｐ　＜331.3／188／2＞　資料番号 10808939)

🕮 原典解説スミス「国富論」／高島善哉(著)
春秋社　１９５８年刊　２０７，２ｐ　＜331.3／129＞　資料番号 10808004
＊改訂版あり。(１９６１年刊　２０５ｐ　＜331.3／129／2＞　資料番号 10808012)

🕮 本邦アダム・スミス文献／アダム・スミスの会(編)
弘文堂　１９５５年刊　２２７ｐ　＜331.3／9＞　資料番号 10806198
＊増訂版あり。(東京大学出版会　１９７９年刊　＜331.3／9A＞　資料番号 10806206